

富岡の薬師

富岡を歩く

富岡区(豊栄地区)は、国道296号に並行する小高い台地上に寺院や神社があり、その周辺と台地縁辺部に集落があります。

現在の大字は江戸時代初めから明治22年3月までの村で、その成立はおよそ400年ほど前にさかのぼり、1630年代には各村の村域がほぼ決まったようです。市内の旧八日市場市域52か村、旧野栄町域6か村の計58か村のうち、

中台村(匠瑳地区)とこの富岡村だけが成立経過が他村と異なっています。

1700年代の村名を知ることができる「元禄郷帳」には、この2か村の記載が見られません。1830年代の「天保郷帳」に単独村として出てきますが、「松山村の内」とあります。つまり、富岡村と中台村は、この130年間のある時期に松山村から分離独立したことになります。

村名の書かれた石造物などを調べると、1721年のものに「富岡邑薬王寺」とあり、この頃から村名が使われ出し、領主の旗本も独立を認めたのでしょうか。

薬王寺に関しては、大正10年に刊行された『匠瑳郡誌』に「薬王寺並びに薬師如来の由来」が記載されています。

それによると、本尊・薬師如来像は古くから千葉家に伝来し、1590

年の小田原落城の折、家臣・飯島土佐守が像を抱えこの地で一夜の宿としたのが弓削寺だったといえます。この寺は、奈良時代の僧・弓削道鏡にまつわる寺とされ、記録が書かれた1657年8月に弓削寺が現在地に移され、薬王寺となったと記録されています。

1720年から1770年代にかけて、弘法大師像や鐘楼堂(釣り鐘堂)、山門などが建てられ、薬王寺の景観が整備されました。同時期にまつられた石造物にも「富岡村中」「村中善男女」「郷中善女人」と見え、村全体で活動した様子が知られます。1843年ごろの富岡村の家数は32軒でした。

集落に多い飯島姓の祖先とされる土佐守と薬王寺創建を伝える記録の実物、薬師如来像を拝見する機会はまだまだありませんが、本堂(薬師堂)正面には「奉納四十九堂」「奉納百堂」と書かれた下に、新盆精霊や追善供養戒名のお札が貼られ、地域の人たちにこの薬師堂は溶け込んでいます。

(元 市職員・依知川雅一)

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080



薬王寺の薬師堂